奥武蔵

466
奥武蔵研究会
2026年（令和8年）10月



日和田山　登山家・田部井淳子さんの碑　　撮影：清水卯平氏

私的な奥武蔵の楽しみ方

小泉 重光

「ご当地アルプス」は各地でよく耳にすることがありますが、低山のひしめく奥武蔵では余り意味がないようにも思います。どちらかといえば「○○富士」と呼ばれる山々の方が親近感を憶えるのではないでしょうか。じつは自宅の近くにも丸吉講が築いた富士塚があって、富士山を拝する盛り土の頂には祠があります。実際にはすでにビルに囲まれて富士山を眺めることは叶わなくなっていますが、富士山から持ち帰った溶岩を並べたり○合目と名づけられていたりと、当時の人々の信仰の篤さを垣間見ることができます。江戸時代に流行した富士講による富士塚は規模も様々で、越生町の西山富士（盛限山）のように大内院（お鉢）を再現された遺構もあり。そもそも御神霊には時間と空間の概念がないので、例えば○○神宮から御分霊を地元の祠に遷座しても御利益が得られます。

ひと昔前、盆栽などを指して「箱庭文化」と呼んでいたようですが、私的には単にミニチュアを造って楽しんでいるとは思ってはいません。何故なら盆栽を楽しむにはその背景に青空を見る想像力が必要だからです。虚飾を限りなく簡素化して想像力をかき立てるのが「粋な日本文化」とするならば、それは前述のような日本の宗教観に通ずるものなのかも知れません。幸いにして奥武蔵や秩父は花のお江戸の観光地的な場所に位置しています。勿論それは信仰心を前提としているので、宗教的に解釈された自然石や人々が寄進した石仏などを今も目にすることができます。

父親に連れられて歩いていた奥武蔵の丘陵地帯の山々は、耕作地が減少して植林だらけになってしまい、だいぶ様変わりをしてしまいました。そして、人口減少に伴って温かい人情もどこえやら…けれども、人々が暮らした痕跡が未だに残っている山域なので、江戸時代に旅した人々の受けた感慨を共有できる楽しみがある。秋の夜長、前人や諸先輩の書いたレポートをじっくりと読んでみたい。

目次

第466号　令和8年10月

私的な奥武蔵の楽しみ方 …… 小泉 重光 表2
秩父 奥武蔵に土屋文明の足跡を尋ね
定峰峠 慈光寺を歩く …… 加藤 恒彦 1
秩父札所四番 高谷山金昌寺 その一 …… 野口 実 5
―石仏に会う楽しみ―
小瀬名富士は今いずこ …… 村木 悦子 8
歩いて巡った秩父札所午歳総開帳 …… 坂口 由加里 9

―― 小川町 仙元山 …… 岡野 守 12
橋本山からユガテ …… 村木 悦子 12
イモリ山から吉田山 …… 吉田 美知子 13
都幾山から金嶽 …… 髙橋 澄夫 14
宿谷の滝から物見山 …… 岡野 守 15
7月の山行集会
「ファーストエイド講習会」 …… 村木 悦子 15
感想文 …… 和田 裕之 16
―― 顔振峠から黒山三滝 …… 大川 満代 17

山行計画 …… 18
集会案内 …… 19
会務報告 …… 21
奥武蔵情報 …… 21

奥武蔵　第466号
令和8年10月1日発行

発行者　小泉重光
発行所　奥武蔵研究会
〒175-0092 東京都板橋区赤塚7-18-7
編集者　小泉重光
　　加藤恒彦
印刷所　㈱ヌーベル社　成川茂雄